五　大杉を助けて

＜近代思想＞の集まり

いよいよ帰国ときまって、山鹿がようやく工面した金三〇円は、長崎までの船賃ぎりぎりの額であった。それに山鹿洋行がせんべつにくれた上海ドルの大銀貨が三枚である。

　こうして山鹿は着のみ着のまま、二年ぶりにともかく長崎へ上陸した。しかし宿屋どころか飯も満足に食べられぬという始末であった。丸山遊廓の上の墓地で蚊にくわれながら一夜を明かした翌朝、汽車賃だけでも稼いで――と長崎電灯会社へ行ってみたが、浮浪者扱いであっさりと断わられ、窮余の一策、上海ドルを売りとばしてようやく京都までの切符を買った。汽車に乗ったが腹ペコである。広島に高橋邦太郎というエスペランチストがいるのを思い出して下車。ワラにもすがるつもりで訪ねたがお茶一ぱいありついただけであった。再び汽車にのって京都にたどりついた時には、もうへとへとで倒れんばかりだった。

　しかし、飯を食べて人心地がつくと、もう心は矢のように東京へと飛んだ。呆れる兄に頼みこんで

切符を買ってもらい、久方ぶりに東京へ着いたのは九月もすでに半ばをすぎた頃だった。

×　×　×

　山鹿は東京駅に着いたその足で、日比谷の角にあった実業の世界社を訪ねた。そこに同志が何人か勤めていると、かねて聞いていたからである。ところが事務所の奥から出てきたのは、何と見おぼえのある、あの相坂佶であった。

　――彼は大逆事件で取調べられ、その所持品と手帳に書いていた文句から不敬罪で、千葉監獄に二年近くはいっていたが、明治天皇の死による大赦令で出獄したのだという。京都の同志社を中退して、いまここで働いているという久板卯之助も出てきて話に加わった。そこへまた、荒畑寒村がぶらりと来合わせた。荒畑は大杉の家で『近代思想』最後の集まりがあるのでそれの知らせに立ち寄ったのであった。

　大杉の家は、新大久保駅に向って二百メートルほど手前を、右に曲った小路の四、五軒目で、入口に六角の外灯が出ていて、仏蘭西語教授と書いてあった。入るとせまい玄関で、右が居間、大きいすり鉢のような火鉢が据えてある。その奥が大杉の書斎でガラス張りの本棚、壁には額入りのクロポトキンとバクーニンが懸かっている。床の間の刀掛けに大小二本の刀がかけてあったがそれは大杉の父の遺品だった。大杉はマドロスパイプでネイビイカットをくゆらし、堀保子さんはきちんとした白エプロンで、白い面長の顔におくれ毛一つない姿で、愛想よく客をもてなした。名物の大すり鉢は、神近事件の直前、葉山移転の時に運送屋が車から落として、堀さんを長い間悔ませたのが大杉との破鏡の前兆になった。また大小の刀は、父の金鵄勲章と共に、月

刊『平民新聞』の発行資金のために売りとばされた。

荒畑の家も、大久保百人町の大杉家のすぐ横丁にあった。裏は遠くまで見晴らす戸山ケ原で、奥さんのお玉さんはよくこめかみに頭痛膏をはっていた。

その夜の『近代思想』の会でどんな話が出たか忘れてしまったが、百瀬晋とはその時初めて出会った。私が相坂と一緒に出席すると、荒畑が目配せをして、小さな紙を丸めてポイと投げた。開いてみると「ここで何もしゃべるな」と書いてある。マゴついていると、大杉が「山鹿君、シナへ行ってきた話をしないか」というので、「ここにスパイは居ないか」と聞いた。「この家の中だけは大丈夫だ」という。それから師復のこと、民声のことなどを報告した。しかし荒畑がなぜあんなことをしたのか、いまもわからない。

さて山鹿は、落ち付くところがないので、とにかく大杉宅に寝泊まりして、平民新聞発刊の雑用を手伝うことになった。しばらくして、東京電灯会社が試験係を募集しているという話を聞いた。山鹿は電気の知識を活かして、そこへもぐりこむことになった。

東京電灯の試験係というのは、メッカーという発電機の入った重い函をぶら下げて、一軒毎に漏電がないかを調べてまわるのである。その頃メーター契約はほとんどなく、一般家庭は電球による一灯ずつのワット契約であった。だから電球が切れると電灯会社が無料でとりかえてくれるのだが、ワットの大きい電球を私物で買って、それをつけて盗電することがしばしば行われていた。つまり試験係はまた盗電発見係でもあった。

――そこで私は、このときとばかり巡査の家を調べてまわった。大きな球をつけていようものなら

容赦しない、泥棒よばわりして平身低頭させて溜飲をさげた。その反対に、貧民窟では安全な盗電法を、それとなく教えてやった。しかしこの何よりの楽しみもそのうち会社が気付いたのか、上役と二人一組でまわるようになって失われた。その上、毎日尾行スパイがついてまわり出し、とうとうクビになった。

月刊〈平民新聞〉の苦闘

一九一四年（大正三年）九月、大杉は自ら〈知的手淫〉と称した『近代思想』を廃刊し、かねて計画していた月刊『平民新聞』発刊にふみきった。その第一号は四六四倍判一〇頁、部数三〇〇〇、一〇月一五日発行である。しかし第一号は印刷所から事務所へ運んだとたんに、全部が没収された。二号も三号も、引き続く発禁没収で陽の目をみなかった。警視庁は、まず法的に罰するよりも経済的に自滅させる作戦をとったのである。

それに対して大杉らは、刷り上がった新聞を印刷所から、いかに一部でも多く没収前に持ち出すか、苦心惨憺、きびしい見張りの裏をかく知恵くらべで対抗した。また第四号は、記事内容の全部を『朝日新聞』などから転載したもので埋めるという苦肉の策で発禁を防ぐ手に出た。これにはさすがの警視庁も文句がつけられず、はじめて月刊『平民新聞』が世間に現われたのだった。しかしまた第五号は、十数名の警官が印刷所へ押しかけ、刷り上がり中のものを押収し、眼前で解版させるという徹底した禁止ぶりであった。あまりのことに憤激した大杉、荒畑、宮嶋資夫・麗子、山鹿、百瀬晋、吉川守圀、野沢重吉の八名は、ある日街頭デモに飛び出した。

二月一七日、売れ残った第四号一〇〇〇部をてんでに抱えた一行は、昼前数寄屋橋を出発した。寒風の中を日頃の欝憤この時とばかりに革命歌をうたい、ときに大声で演説をしながらのサンドイッチマン行進であった。あわてたスパイ連中は交番毎で警視庁に連絡して指令を受けとっていたが、四号は合法の出版なのでどうしようもなかった。神田、本郷と思う存分騒ぎながら、新聞を売ったり撒いたりして須田町へきた時はもう夕方であった。「須田町で荒畑寒村が街頭演説をして、尾崎行雄を手厳しく攻撃した。みんな御飯を食べていないので腹が減って来た。そば屋に入って、かけそばを食べた。大杉が金を払った。それが何ともすまないような気がしたのである。思えばみんな簡素な生活だった」とその時のことを宮嶋は書いている。

発禁〈平民新聞〉を撒く

この四号のほか、発禁押収される直前に、あの手この手で毎号相当量の新聞が持ち出されていた。とくに車夫・野沢重吉の手を変え品を変えて持ち出す働きは抜群で、それは彼の手で各所に分散してかくされてあった。しかし、切角の苦心もただ山積するだけで、配布することができなかった。山鹿は、野沢からその新聞を隠した場所を教えられていて、何とかそれを撒きたいと思い、ある日相坂に相談した。

――相坂は「大杉、荒畑に無断でやるのは悪いんじゃないか」と言った。私は「常日頃大杉は、何でも自発的にやれと言っているではないか」と、独断決行することを主張し、とうとう納得させた。

まず、スパイをまくため、当分部屋に帰らぬことにした。昼間は、千住や浅草の寺や神社で昼寝をして時間を過ごした。夕方、工場のひけ時に起きて、第一日は小石川の砲兵工廠の通用口に立った。はじめは皆おっかなびっくりで、誰も新聞を受け取らないが、一人が取ると次々に手をさし出してくる。翌日は本所の電機工場、その翌々日は月島の勝鬨渡しと転々とし、約一週間ほどで全部を撒き終ったところ、とうとう金がなくなった。

もうこれで捕まってもよいと覚悟をきめて、相坂と二人で訣れのあいさつに荒畑の家へ裏口からいき、大杉を呼び出してもらった。そのとき荒畑から教授をうけた被告術は、入獄したら監獄ではおとなしくしているに限るが、法廷では思いっきり政府攻撃と、労働者の主張を怒鳴りちらす。しかし裁判長が「この天皇陛下の裁判所を何と心得るか」とか「上御一人に対し奉り……」とか来たときは、不敬罪にひっかけるワナだから、用心して黙り込むのだ、というものだった。そのうち表に張っているスパイが気付いたらしい。大急ぎで小使銭をもらい、戸山ケ原の草むらへ一目散に逃げだして助かった。しかしその金もすぐなくなった。こんどは築地の野沢老人のところへ仕事の相談に行ったが、そこでとうとう捕えられた。

築地署から警視庁特高課へ送られると、丸山鶴吉課長が勝ち誇ったように、机の上に山積みになった平民新聞をさして、「見給え、君らの撒いた新聞は全部この通り労働者が返しにきたのだ。君、とてもだめだよ、アキラメて今後一切やらないと言うなら、今回はとくに不問にするが……」と言う。「クソ喰らえ、お前らが労働者をおどかして取上げたくせに……」と思ったが、もう撒くものはなくなったし……。「今後はやりません」ということで、無罪放免になった。

相坂と取調べは別々だったが、すれちがうときや隙を盗んで、二人はいつもエスペラントで話したので、刑事の前でも秘密の相談がうまくやれた。

最初の秘密出版

平民新聞はとうとう廃刊になった。発禁つづきで紙代も入らず、あらゆるものを売りとばした上に借金を背負った大杉は、満身創痍、手も足も出ない状態に近かった。それでも大杉は、竹早町でサンジカリズム研究会を続けていた。しかし、

——集まるのは文士の卵のような連中ばかりであった。芸者のうわさ話なんかをするだらけた雰囲気で、大杉もむしゃくしゃしているようだった。ある時、大杉にその不満を言ったとたん「つまらなければ、自分でいいようにしたらいいじゃないか。席でだまっていて、何を言うか」と、怒鳴り返された。

平民新聞廃刊後どうするかを、渡辺政太郎の家で相談会をしたことがあった。たまたまパンフを出すか、新聞かで論争が起こった。私は「政府の許可をもらって新聞を出すなんて屈辱的な妥協行為だ。内山愚童がやったように、秘密出版で自由にものを出すことを、まず考えるべきだ。政府の許可なんかくそくらえ」と、思わず大声でしゃべった。大杉は「こんな外からも聞こえるようなところで、何を言うか」と、はげしい見幕で怒鳴りつけた。

何もかも行きづまっていて、大杉も山鹿たちも苛立っていたのである。さて大杉に怒鳴りつけられた山鹿は、「よし、そんなら俺ひとりででも秘密出版をやってやる」と、心ひそかに決意していた。そ

のころ彼は、相坂と共同生活をしながら、神楽坂で古本の夜店を出していた。本を持ち歩くのに、尾行の目をごまかせる便があった。資金は、ハワイからきた女エスペランチスト、バハイ教の布教師アレクサンダーに頼んで百円を引っぱり出した。

——印刷は『第三帝国』を出していた茅原華山のところに頼みこんだ。そしてクロポトキンの『青年に訴う』を出すことにして、神田錦町の印刷所で校正をやっていると、突然大杉が入ってきた。かくす間もない。ところが彼は黙ってゲラ刷りを読むと、十円札を一枚その上において、ものも言わずに出ていってしまった。この『青年に訴う』の秘密出版は、出版の予告広告の形であるが、実は『青年に訴う』の全文がパンフになっていた。発行所はでたらめにつけ、その前書きは百瀬晋に頼んで書いてもらった。彼は表紙の著者紹介に、「クロポトキンはロシア貴族の出にして……」という書き出しで名文をふるってくれた。

いよいよ出来上がると、私は出歩く時五、六部ずつもって、これと思うやつに手渡しした。ある夜相坂、百瀬と三人で、上野広小路を歩きながら二人の青年に手渡しをした。すると、ちょっと読んでからこちらを探している様である。人混みにかくれて、あとをつけながら観察した。別にスパイらしい様子もない。近寄って話しかけると、一人は上野の寄席三宣亭の息子田戸正春、もう一人は友人の五十里幸太だという。これがきっかけで、二人はのち同志として長く活動するようになった。

短刀とピストル

秘密出版はしたものの、うまく成功してしまうと、それでどうというものでもなかった。そして、山鹿は「もうこんな状況では、いっそテロリズムで現状を打開する以外にない」と思うようになっていた。ある日、誰にも相談せず、古道具屋を漁って短刀の古いのを買った。それから、さらに芝居で使ったらしい大きな六連発を手に入れた。

――短刀は研いでみたが錆がなかなか取れない。宮嶋が魚屋のボテフリをやった経験があるというので研ぎを頼んだ。すると上等の出刃のように良く切れるようになった。しかし短刀では、近づくまでに押えられて、失敗まちがいなしである。それで、ピストルを毎日ひねくりまわして工夫をこらした。まず歩兵銃用のを短かく切って、薬莢に使うことにした。火薬は、猟銃をもっている人から手に入れたが、発火点の雷管がない。子供の使う紙火薬を湿らせて、爆発しないようにし、それを薬莢の尻のくぼみにつめ込んだ。すず箔を張りつけて乾かし、試射してみた。みごとに弾丸が飛び出した。大成功である。ところがネライをつけ、さてこんどは――と発射してみると親指より太い筒からとび出す反動は、とても片手では制しきれない。とんでもない方向に飛んでしまう。これを使いこなして、目的物に命中させるのは大変なことである。毎日、あれこれ持ちまわっているところを、とうとう大杉に見つかった。意外なことに、さすがの大杉も驚ろいたらしい。「幸徳事件では、思わぬことからデッチ上げられた。そのためどんなに大きな迫害が起こり、運動が立ち遅れたか、それを考えると単純な盲動は、政府を喜ばせることになる。一人二人

のテロリストで革命がはじまるわけはない。今はその時代ではない」と、顔色を変えて説いた。はじめ不服だった私は、次第にそれを納得し、とうとうその計画を放棄した。

そのころのエスペラント運動

――宮嶋資夫の姉は、大下藤次郎という画家の未亡人だった。その小石川水道町にあったアトリエを大杉が借りることになった。家が大きかったので、大杉はそこでフランス語を教えたり、労働者相談所の看板を出して、毎月二回アナキズム講演会を開き出した。私と相坂はその一室にころげこんだ。

このアナキズム講演会に、エロシェンコを呼んで来て、彼がロンドンでクロポトキンに会った時の話を山鹿が聞いたのも、この頃のことである。エス語通訳者は福田国太郎だった。この盲人のエスペラント詩人エロシェンコといえば、彼の来日が一つの刺激となって、この頃からエスペラント運動は少しずつ復活しはじめた。

一九一四年（大正三年）頃、銀座のカフェで毎水曜に集まるのは小坂狷二、千布利雄、山鹿、福田国太郎、ほかには時々来る田鎖綱紀（速記の発明者）、黒板博士、それとドイツから帰ってエスペランチストになった気象台長の中村精男……。ワシリイ・エロシェンコが来てエスペラント語会話が盛んになったが、そんなある日の合合で、各人が何を目的にエスペラント語を学んでいるか？を発表したことがある。「エスペラントを発展させるためにのみ運動するのだ……」という者は小坂、千布、中村、黒板、田鎖の五人。「エスペラントを用いて人類社会の解放を達成するため……」という者は、福田、

エロシェンコ、山鹿の三人だった。

エロシェンコは、来日して暫くした時、散歩をしていて偶然に秋田雨雀と知り合いになった。それから秋田のつてで望月百合子や神近市子、武者小路実篤、上山草人、片上伸、相馬黒光、大杉栄などと知り合っていった。大杉とはたまたま劇場で出会ったが、「この人はレフォルミスト（社会改良家）オオスギだ」と秋田が紹介したので、大杉はそれが気にくわずに挨拶をかえさなかった、という話が残っている。しかし、その後エロシェンコは、とくに神近と仲がよかったりして、大杉の会にも顔出しするようになった。彼がエスペラントで話すとき、通訳は福田国太郎や山鹿の役であった。

福田は、毎月の月給のほとんどを投じて、海外からさまざまなエスペラント文献を買い集めていた。その蔵書はスパイにふみこまれてもわからぬように二段構えのアドレスをつくり、安全通信場所を確保していた。またエスペラント文をロシア文字でタイプして、ちょっとでは官憲に判読できぬ方法をとっていた。彼のこのような用心深さは、運動のいろんな分野のなかで、実際行動に不むきな自分になしうる最大のこととして、海外からの情報を誰よりも早く集めて同志に提供すること、散佚する貴重な世界の文献を後代のために保存管理すること、そしてとくにエスペラントの分野からアナキズム運動をすることを自らに課し、実行していたからであった。それゆえ彼は、どんなに忙しいときでも、タイプを叩いて手紙を書くことをいとわず、また読みもせぬ本代に月給をなくしてしまっても惜しまなかった。

福田、相坂、山鹿の三人はアナキスト・エスペランチストとして最上のトリオを組んだ。福田が最年長だったので、彼の神田の下宿を相談場所にして、よく集まった。やがて福田は、会社の転勤で大

阪へ移ることになり、相坂も、大杉が逗子へ引越したのを機に山鹿と別れ、大阪に職をみつけて離京した。（大阪へ移ったこの二人は、その後、全文エス語のアナキズム文芸誌 "Verda Utopio" を発刊したり、日本ではじめて労働者を対象とするエス語講習会を開くなど、エス語運動史上にも残る大きな仕事をやることになった。）

北一輝宅への居候

後に残った山鹿は、行きどころがなかったので、黒板博士のところへ転がりこんだ。博士の家はJEAの事務所になっていた。その事務を手伝いながらの書生というわけである。ついでに言えば、初期エスペラント運動の中心者黒板勝美は、堺利彦とは親しい間柄であった。初期平民社には、創立当初からしばしば出入りして資金カンパに応じたり、また新聞の記事なども提供していた。例えば一九〇七年（明治四〇年）の日刊『平民新聞』一月一七日号の「平民日記」には、「今日は黒板君が編集局に遊びにきて、エスペラントの話など大分はずんだ。別項の一口話の一つは、黒板君がエスペラントの本から翻訳してくれたのだ……」とある。

しかし大逆事件以後の黒板は、一切その関連を断っていて、山鹿の質問にも「幸徳はよく知っているが、今は何も言えない。社会主義のことを言うのは損だ」と触れられるのを嫌がった。山鹿を世話するのも、警視庁に届け出て了解をとってということであったらしい。それで、山鹿の生活費を黒板は警視庁からもらっている、などという噂がとんだりした。

——私が黒板博士の家に転がり込んで、半年あまり書生代りをしていたある時、私の尾行係の刑

事秋葉喜作が、青山南町に北一輝がいることを教えてくれた。暇つぶしにと出かけてみた。

北は左の目が義眼で口ひげをピンと蓄わえて、支那服を着ていた。『支那の革命と革命の支那』という出版物を、刷り上がった頁からその都度名士、政治家に発送していた。一冊に仕上げると印刷屋に払いが出来ない為と、出版法にも引っかからない便法だったらしい。彼にエスペラントの話をすると、すっかり気に入って、すぐ俺の方へ移ってこいという。そのとき支那軍閥の譚人鳳が、挙兵準備中で軍用金に日本の軍事公債をたくさん持っていた。北はそれをタネに参謀本部から現金を引き出す運動をしている最中だった。そこへ割り込んだら、運動資金をとるチャンスがあるかもしれぬとおもったので、黒板博士の留守中逃げ出して、北の家へくらがえした。

北の話では、第一革命当時、孫逸仙を助ける名目で動いた連中は、みな利権あさりのシナゴロで、本気で助けたのは宮崎滔天という浪花節語りとその一家だけ。北は孫の三民主義が西洋式の共和制なので賛成せず、東洋独得の共和主義を主張していた。

北の妻君は鈴子といったが、長崎の出で、上海で水商売をしていたのをヒカせた女だった。上海では馬車を乗りまわし、金の延板でマゲを巻いていたという。北の全盛時代だったらしい。この北に、私一人で対抗するのはいささか心細いと思ったので、大阪の相板を呼び寄せたいと申し出た。「ああ、いいとも、当分ぼくのところで勉強したまえ。そのうち、東洋の鼎（かなえ）は沸くのだ」と彼は気軽く引き受けた。そこで相板は再び上京して私と一緒に同居することになった。

しかし、その頃の北は落ち目らしかった。上海にいた鈴子の父が転がり込み、毎日居催促する始末である。北は譚人鳳を東京に呼んで、参謀本部と交渉したところが、その軍事公債はもう紙

くずに等しいものらしく談判は不調だった。譚は帰国したが、北は最後に上海でもう一芝居打とうとした。そして譚から金を送ってもらった。「リョヒ一〇〇オクッタ」との電報で、北は一万円だとよろこんで取りにいったらただの百円。夜逃げ同様に北は出発した。

尾行刑事の仲人で結婚

北に置いてけぼりを喰ったのではどうにもならない。相板は再び大阪に帰った。山鹿はその頃、北家の家事見習い娘、ミカと仲よくなっていた。ミカは北の同郷新潟県から三年前に出てきて、子供同様に可愛いがられていた娘であった。北家にもたえず出入りしていた山鹿の尾行刑事秋葉喜作は、この際、山鹿の身を固めさせようと考えた。山鹿はもちろん渡りに舟で、あべこべに頼みこむ程である。秋葉は、国へ帰れというミカの親許と話をつけ、自ら仲人となって、二人に世帯をもたせることにした。勤め先も、秋葉が顔を利かして奔走してくれた。

――場所は大久保、新宿から市電が裏通りへはいって、低地の谷間のような水田の中の、右は高台の北向き天神がある。その下一帯は貧民窟で、小さい町工場が入りまじっていた。私たち夫婦が、そこの蓄音機針の工場に住み込んだのは、友愛会が生まれ、労働運動がようやく始まった頃であった。ガラス窓はみな破れて、天井もなく、風が吹き通って行く。住み込み夫婦が寝る所だけ、ボロ畳がひいてある。至るところ針の原料の鉄線が山と積んであって、座る場所もなく、一日中立ちどおしで仕事をしなければならなかった。

そういうところで、夫婦共働きの新婚生活が始まったのである。山鹿は二四歳、ミカは二〇歳であ

った。

葉山事件と山鹿

その頃、大杉の三角関係がちらほら噂にのぼり出していた。山鹿は、堀保子にいろいろ世話になっていて、しぜん彼女に同情した。しかし運動で追いつめられた大杉の、どうにもやりきれぬ思いが、そんな捌け口を見出したのも、わからぬでなかった。ある日、山鹿は男女問題について大杉に質問したことがあった。すると、「結局、男は女でさえあれば、それでいいのサ」と、さも疲れた投げやりの返事が返ってきた。当時恋愛最中の山鹿は、その答えにいささか憤慨した。そして新婚早々で、針工場のはげしい労働も苦にならず、夢中で一、二ヵ月が過ぎたある日、突然大杉が神近に刺されたという知らせが飛び込んできたのである。

――市ちゃんこと神近市子、英語なら油紙に火がついたようにしゃべる。当時ぼくはサロメと名付けていた。その市ちゃんが大杉を刺してパチンコで撃ったという電報がきた。打電者は魚屋のボテ振りから一転してアナキストになったが、赤城山の国定忠治に私淑しているという宮嶋資夫だった。早速相州葉山へきてみると、堀保子姉さんは小さい火鉢にむいて涙ぐんでいる。宮嶋夫婦は市ちゃんと旧友関係なので、何でも「野枝が悪い、伊藤がけしからん」の一点張りである。

大杉の病院へ行ってみると大したこともなく、喉の辺りをほんのちょっと、切れない小刀でなでた位の傷だった。前夜、野枝さんといつも泊る宿屋へ神近が押しかけて泊り、夜半に突如起き上がって切りつけたが、大杉に怒鳴られて逃げ出したそうだ。ピストルは種ケ島だったので使え

なかったらしい。訪ねた時は野枝さんが一人で看護していた。宮嶋は「貴様らは新道徳を唱えながら、旧道徳を脱しきれないで、この態はなんだ」と、怒鳴りながら野枝さんを殴って引き揚げた。ぼくは大杉に「一時野枝さんに手を引いてもらって保子さんに看護させてはどうか」と言ってみたが、大杉は「イヤ」だと言ってきかなかった。

あとで保子さんにそれを報告すると、野枝さんのことは別に恨んでいなかったが、「神近が自分でモノしたモノを、モノされたからといって殺そうとしたのは全く馬鹿なことです」と憤慨していた。年上の保子さんは大杉を子供扱いにし、大杉はまた「あまり姉さん扱いしすぎた」といっていた。

大杉がその頃の不満のやり場を、身辺の男女関係に求めようとしたのは、人間として自然の成り行きだったろう。久しく一夫一婦にあまんじて年長の堀保子と同棲してきたが、その頃近づいた神近市子の肉感と、伊藤野枝の知性に惹かれたのも、今から思えば彼のやり場のない心の捌け口でもあったのだ。葉山事件が知れわたると私は「恋に朽ちなん名こそ惜しけれ」の感をもった。しかしそんなことはプライバシーの問題で、第三者の関知することではなかった。神近は宿屋から留置場へ、堀は四ッ谷に間借りして野沢重吉夫妻の世話になり、大杉はこれを機に野枝と愛の巣におさまった。

私は、大杉と野枝が下宿に落ち付いた頃訪ねてみた。話の途中で、私が葉山に駆けつけた時宮嶋らと野枝に暴行したことを思い出したらしく、謝罪せよと要求した。私は、年長の宮嶋に責任を押しつけて、とうとう最後まで謝まらずにすましてしまった。

しかし、この謝まらなかったこだわりで、山鹿はそれ以来、何となく大杉から遠のいた。そして、それを思い出すたびに、山鹿は心中気まずい思いで後悔することになった。

兄たちの死

一九一七年（大正六年）二月、洋画家だった兄慶蔵（第九子）が急死し、山鹿は呼び戻されて京都へ帰った。ミカを連れての、はじめての里帰りであった。そのころの点林堂活版所は、欧州大戦景気の名残りで多忙をきわめていた。葬儀の後、ちょっとだけのつもりで手伝った仕事からなかなか手が抜けられなくなった。もっとも、山鹿にしてもすぐ東京へ帰らねばならぬといった事情はなかった。帰れば、針工場の重労働が待っているだけであった。それに、何となく大杉と気まずくなってから、運動からも遠のいたような形になっていた。

京都でしばらく点林堂の仕事を助けようか、などと、ぐずぐずしている間に日時は過ぎた。ところが四月、にわかにこんどは長兄の粂次郎が死んだのである。風邪から肺炎となり、数日間のあっというわずらいであった。長兄の粂次郎は兄弟中の最年長で、山鹿とは親子ほども年令が違っていた。そして父善兵衛が経営に失敗して隠居した後は、事実親代りのような存在で、点林堂をここまで育ててきた一家の大黒柱であった。この二人の兄が相継いで死んだ後、残された男の兄弟は他家へ養子へ出た福三郎（五子）小四郎（七子）を除くと、健吉（十子）一人だけであった。兄健吉は、その頃すでに文展の特選をとり、新進気鋭の工芸家として知られ、家業をかえりみることはどうしても無理であった。（今なお健在で、日本芸術院会員・工芸部門―手織錦、文化功労者、京都市名誉市民の山鹿清華である。）

とすれば、あとは山鹿以外にいない。しかも、印刷についてはすでに充分の技術と知識をもっている。こうして山鹿は否応なく、後継ぎの兄嫁を助けて、点林堂の経営を引き受けねばならないことになってしまったのであった。

仕事に打ち込みはじめてから一ケ月、二ケ月はまたたく間に過ぎた。特高刑事秋葉喜作を仲人にして針工場でしばらくおとなしく働いていたせいか、それとも仕事に追われて、ほとんど運動から離れていたせいか、気がつくと、山鹿に付きまとっていた尾行も、何時のまにかついてこなくなった。家人たちも次第に安心し、ミカも落ち付き、みんなから〈江戸ッ子弁の嫁さん〉と呼ばれてかいがいしく働きだした。しかし山鹿の本心は、ともかく成り行きで家業についた以上はできるだけ仕事に精励して、ひとときの時機をかせぎつつ、一転、運動に飛び込むことができる機会を待つことであった。

京都の米騒動

一九一八年（大正七年）のそんな時、米騒動が起こったのである。京都のそれは八月一〇日夜から始まった。七条柳原部落に数百人の群衆が集まった。一たん警察の鎮撫で解散したが、再び集まりだして、東七条派出所の表戸ガラスを破壊した。それをきっかけに、群衆は怨みの的となっていた沼田米店へ押しかけて、値下げ販売を迫った。さらに、附近住民を加えて数隊に別かれた群衆は、行くさきざきで「白米一升三〇銭デ売リマス」という貼紙を書かせ、下京一帯の米屋を襲い始めた。市内に点在する部落から始まって、九時半には参加した民衆が約二万。それは翌一一日夜にも再びくり返され、ついに軍隊の出動で午前三時ようやく全市は平静となったのである。

この米騒動については、「各地の社会主義者はほとんど目撃者ないし評論家に納まっていた」というのが史家の定説である。が、山鹿は部落不穏の噂を聞いて、家人には商用といつわり、服装を変えて、町へ飛び出したのだった。部落への通路は警察が張番をし、一々尋問してうるさく取締っていたが、彼は部落の者が出入りする抜け道を知っていて、たくみにもぐり込んだ。

――八月一〇日と一一日、私は、京都の米屋を襲撃してまわった七条の小数同胞といわれる諸君たちと一緒に行動した。日が暮れる前から、米屋は大戸を降して家の中で小さくなっていた。次第にみんなが集まり始めた。と、誰かが石をバラバラッと投げた。米屋の外灯が派手にガチャーンと音をたててわれる。それに勇気をえて一勢にときの声をあげる。巡査が目ぼしい奴を捕えて引きずり出そうとする。私はすばやく駆け寄って、その捕えて放さない腕の上にまたがるように飛び乗る。すると巡査の強腕はあっけなくはずれてしまった。向うでも巡査につかまえられている。追いかけて飛び乗る、腕がはずれる。みんなが囲むようにして取りもどす。「そうだ、ヤレ、ヤレッ」と怒鳴っている。もうどうしようもない。巡査が逃げ出す。（この時私が助けたのが縁で、眼くされの青年と義兄弟となり、のちのちも付き合うようになった。）

気の利いた者が米屋の荷車を引き出してくる。道路から勢いをつけ、表戸に向ってガラガラドシーンと打ちつける。表戸は壊れて倒れる。そこから女達がザルをもって飛び込んでいく。三〇銭ずつ出して勝手に升ではかって持っていく。米屋の親父に、表に「米一升三〇銭」と書いて出せと要求する。米屋が書いて表に貼る時分にはもう一人もその辺に残っている者はない。

この米騒動当時、大杉は九州から帰京の途中で、九日昼に大阪に下車して一五日朝までいた。その

間、尾行をまくために大杉は京都に一日やってきたが、山鹿は騒動で飛びまわっていて会えなかった。シンパの上田蟻善らが鴨川べりの料亭へ連れていって、一泊して帰ったのである。そのことは、東京に帰ってから保護検束された大杉の、板橋署から大石七分へ出した手紙に、「一一〜一四日。米一揆の巻の中にて。但しその一夜は某待合にて。……」と書いてある。

そして山鹿は、騒動の取り調べで呼び出された検事に知らぬ存ぜぬで押し通した後、一五日朝、大阪駅まで駆けつけて東京へ発つ大杉を見送ったのであった。